

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 34

北海道の開拓で忘れてならないのは、道路開削のため斃れていった囚人たちのこと。彼らが切り拓いた道路の一つが囚人道路と呼ばれた北見道路である。

なぜ囚徒が

江戸幕府を倒し明治新政府が誕生したが、薩摩・長州主体の政府に反感を抱き、佐賀の乱・萩の乱・西南戦争などの反乱が相次いで起こった。さらに、富国強兵のための地租等の増税や資本主義の勃興が貧しい人々を苦しめ、各地で一揆や暴動が勃発。また、自由民権を叫ぶ志士が台頭し、群馬事件・加波山事件・秩父事件などにより数千人以上の人たちが国事犯として捕らえられ、その多くが開拓中の北海道に流罪となった。

明治十二（一八七九）年九月十七日、内務卿伊藤博文が太政大臣三条実美に「近年有期徒刑者、年に二千人にも達しており、やがて数万ともなれば、この者共徒食させて置くには勿体なし。未開の北海道へ遣り土木工事に就勞させるが最善」という建議書を提出。さらに明治十八年、大書記官の金子堅太郎が北海道視察の報告書で、「北海道の道路工事は難工事である。囚人を使役すれば安価で、たとえ死んでも監獄費用の節減に成る」といった要旨の復命書を書いていた。

このような思惑により、樺戸・空知・釧路にそれぞれ数千人収容の集治監を建設。石炭・硫黄の採鉱や道路の開削などに惜し気もなく囚人の労働力を投入し、酷使したのである。

急がれた工事

明治十九（一八八六）年、明治政府は札幌から旭川を経て網走までの三六〇キロ

を中央道路と名付け、開削に着手した。工事は樺戸集治監・空知集治監の囚人たちを



明治24(1891)年の北見道路

強制使役し、明治二十二年には旭川までの一三五キロを、翌二十三年には、旭川から上越までの六二キロを完工。残る網走までの一六三キロの開削に、釧路、空知両集治監の囚人を使役させようと、同年八月、約千名を網走に移動させ、「釧路監獄署網走囚徒外役所」とし、翌年四月五日に網走から着工した。

工事は、伐開幅一五間(二七・三メートル)の中央に三間(五・四メートル)幅の道路を造るというものであった。工期は十二月。わずか八カ月であり、先の空知・上川の工事に比べて極めて重労働で、原始林の中、一日当たり六五メートル切り拓いていかなければ工期に合わない工程であった。

工事を急ぎ強行した理由は何か？ それは当時欧米列強が植民地化を競う中、大ロシアがウラジオストクの一大軍港化とシベリア鉄道の起工を行い、極東進出への

脅威が増したためであった。

工事は競争で

囚人は四組に分けられた。一組二二〇人。これに看守部長二人と看守二人が付いた。他に二四人の小屋造り組を先発させ、三里半(一四キロメートル)を一区画として区切り、そこに小屋を建て、各組がそれぞれこの小屋に宿泊し、その区画を受け持って工事を進めていった。

工事を急いでいたため、競い合わせる形をとり、受け持ち区画の工事を早く済ませた組には、どこでも条件の良い区画に手を付けることを許した。そのため、夜を徹しかがり火を焚いての突貫工事や午前一時の始業など、まるで戦場のような使役となった。

言語を絶する重労働に耐えられず逃亡する者は、捕らえて、見せしめのため、皆目の前で容赦なく斬殺あるいは銃殺した。

悲惨を極めた開削工事

食料や資材の搬入は網走からであったから、次第にその距離が遠くなっていった。瀬戸瀬付近まで進んだ九月には、長雨が続いた。できたばかりの道はぬかるみとなり、馬脚が没して進まず、何日も費やした。そのため干魚・野菜・味噌などの副食類の補給が途切れ、栄養不足のために、水腫に罹患・死亡する者が続出。瀬戸瀬だけで死者七〇人にも達する悲惨なものとなった。しかし、工事は留まることなく続行された。十月になると峠地帯は雪となり、十二月には気温が氷点下二十数度にまで下がった。

北海道の寒さに慣れない彼らである。寒さと極度の疲労のため、完工を目前に斃れ死んだ者も出た。

この非人道的囚人労働によって、就労者の約一七パーセントにあたる二一一人の死亡者を出しながら、北見道路は予定通り、明治二十四年十二月二十七日に完工。囚人の血の労役により開削された中央道路が、全線開通した。

その後、囚人強制労働への批判が高まり、同二十七年十二月、衆議院議会でその政策の非を追及され、囚人労役は廃止された。

ロシアの極東進出に慌てた明治政府が開削を急ぐあまり、使役された囚人に過酷な重労働を強い、栄養失調による大勢の死者を出す結果となった北見道路の開削。この囚人道路が、北海道の開拓と発展に大きな貢献を果たしていることを忘れてはならない。



鎖塚供養碑(左は死んだ囚人が埋められた土盛り)

困難を極めた道路開削で
斃れ死んだ囚人の中に、
純心な憂国の士が
大勢いた



あうるの杜

『逍遙通信』編集発行人
澤田展人さん

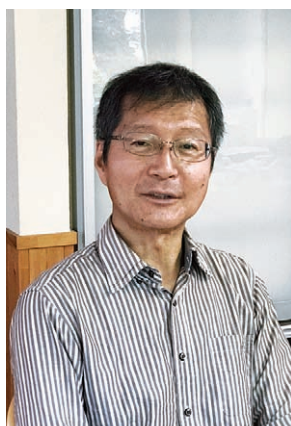
Interview

「多くの人に自分の小説を読んでもらいたい」。そんな思いで個人人文芸誌『逍遙通信』を2016年に創刊し、昨年10月に第2号を発行した澤田展人さんのあうるの杜です。

動機

定年退職後は「好きな旅行もできるし、山登りもできる。いろんなことができるからいいなあ」と何となく夢見ていましたが、いざ退職してみると、そんな楽しみは二〜三年で終わってしまうかもしれないと思ったんです。では、定年後どういうふうなやっていかうかという迷いましたが、小説を書いて発表するような生活があれば、意欲も生まれる。目標を持ちながら定年後の生活をするこはいいことだ、と思ったのですが、私が書きたい小説は長編が多いので、書いてもなかなか発表する場がない。懸賞小説に応募して作家になるという道もありますが、山のように小説を書いても、誰にも読まれることなく、認められずに終わる人がほとんどです。自分にはそこまでして書き続ける精神力も頑張る心もありません。自分の気持ちを保つためには、書いた小説を友だちや関心ありそうな人に

日々の思いを 便りのように 伝えたい



澤田展人
さわだ のぶひと

1954年平岸のリンゴ農家に生まれる。父は『北方文芸』の編集発行人澤田誠一。高校教員として網走向陽・夕張南・札幌南・札幌西高校に勤務するかたわら創作活動を開始。2010年「螺旋の道」で北海道新聞文学賞佳作を受賞。『逍遙通信』は年1回刊、非売品。入手に関する問い合わせは澤田展人方・逍遙通信刊行会に（札幌市豊平区平岸1の16の9の15・メールsawada.kn@jcom.home.ne.jp）。

『逍遙通信』

『逍遙通信』の「逍遙」とは「氣のむくままにぶらぶら歩くこと」です。私は毎日、犬を連れて散歩を

無料でいいから本の形にして読んでもらいたい、それを継続するために、毎年書くんだ、頑張らなければいけない、という立場に自分を置いた方がいいんじゃないか、と思ったんです。

していますが、散歩をしながら自由気ままに思いをめぐらし、その時に浮かんだものを作品化し、それを便りのようにして皆さんに伝えようというつもりで『逍遙通信』という書名にしました。

私は高校で倫理も教えていましたし、今も朝日カルチャーセンターで一般の方対象に「高校倫理を読み直す」という講座を持たせてもらっているのですが、アリストテレスの一派のことを逍遙学派と呼ぶのかと言いつつ、アリストテレスはきちんと座って弟子に講義するスタイルではなく、気ままに散歩をしながら途中で思いついたことを弟子に語るという教え方をし

ていました。この逍遙学派のやり方が私の頭の片隅にあったかもしれないですね。

日常生活の枠組みからちよつと外れて自由な状態に精神を置くと、普段思いつかないことに気がついたりします。で、気ままな散歩にはいい面がたくさんあるようです。

協力者

大学生生活は東京で送りましたが、私と仲の良かった高校の友人たちも結構東京にいましたので、よく夜中まで飲んで遊びました。彼らとは今も付き合いが続いています。河出書房新社の文藝賞を受賞し、その後朝日新聞に入った外岡秀俊や三島由紀夫賞を受賞した小説家の久間十義などもそうした友人で、一緒に自主的な研究会をやりました。彼らにも依頼して『逍遙通信』に寄稿してもらっています。

表紙は、札幌西高で同僚だった美術の前田健浩先生に、私の小説を読んで感じたものを一枚の絵にしてもらい、それを表紙にしています。道展に出した前田先生の作品を見に行つて、とびぬけて力のある人だなと思つたものだから、『逍遙通信』の表紙は先生にお願いしようと思つた時から決めていました。

読者

『逍遙通信』は、読んでもらいたい人に私のほうから無料で差し上げています。ただ私の親しい友人などには、「読んでいい」と思い、なおかつ、次号も発刊して欲しいという方はカンパをお願いしています」というチラシを入れて送っています。

第一号も第二号も、読んだ後の感想文を手紙で送ってくれる方がたくさんいました。これは「澤田君に感想文を送ると喜ぶよ」と言いながら『逍遙通信』を四〇冊、五〇冊といういろいろな人に配付してくれ、奇特定の友人のおかげなのですが、彼は「いい本だと思つたらカンパしてください」とお金ももらつてくれました。

手紙は、老後の生き方について思い感づいているとか、自分もすごく精神的につらい経験をした、という内容のものが多くですね。

読者で多数を占めるのはやはり高校の同期生です。本当にありがたいと思います。こういったことがあるから次の号を出そうという気持ちになれるんですね。

一年に一冊出版することになっているので、『逍遙通信』第三号は今年の秋に発行したいと思つてます。

「言葉は変わる」

室町時代、日本人は「ハ」を「ファ」と発音していた。当時キリスト教布教のため日本に来たポルトガル人宣教師の『日葡辞書』にそのように記載されています。

となると、室町人は「母」のことを「ファア」「煙」を「ファタケ」と言っていたはず。それが次第に発音の楽な「ハハ」「ハタケ」に変化していったのです。

このほか、「ツ」は「ドウ」、「セ」は「シエ」と発音していたそうです。「絵図」を「エドウ」、「背中」を「シエナカ」などと喋っていたのでしょね。

このように日本語は、発音や発音が楽で手抜きができる方向へと流れ、現代の言葉に至りました。

鎌倉時代、吉田兼好が『徒然草』で「何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は無下にいやしくこそなりゆくめれ。いにしへは、車もたげよ、火かかげよこそ言ひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよ、と言ふ。くちをし」(何事も古き世のことばかり慕わしく思える。当節は、むやみに下品になつていくようだ。昔は、車の轆(なぐさ)を上げて牛と車を接続する時に「車もたげよ」、灯の灯心をかきたてて火を明るくせよという時に「火かかげよ」と言っていたのに、当世の人は「もてあげよ」「かきあげよ」と言う。残念だ)という古老の嘆きを記しています。どうです、今でもよく聞く話ですよ。

『源氏物語』や『枕草子』など、我々がスラスラと読めない本があり、しかもそれを「古典」という学問として習うということ自体、昔の日本語がすっかり変わってしまったという証拠です。

長い年月、乱れ、省略され、今に至るという、壮大な淘汰の歴史がある言葉、それが日本語なのです。

OW L I N F O R M A T I O N

この夏、マールが科学館にやってくる！

夏の特展2018

おばけのマールとふしぎなかぐじっけん

7月21日(土)～8月19日(日) 9:00～17:00(入館は16:30まで)

札幌市青少年科学館 2F特別展示室(札幌市厚別区厚別中央1条5丁目2-20 TEL011-892-5001)

休館日/期間中無休

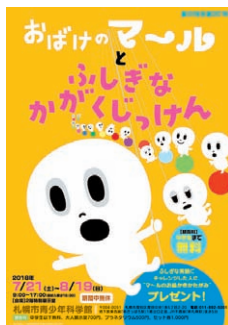
観覧料/中学生以下無料、大人は展示室700円・プラネタリウム500円・セット券1,000円

※団体・65歳以上の方など各種割引制度、展示室年間パスポートあり

札幌を舞台にした人気の絵本『おばけのマール』のマールと仲間たちが、この夏、青少年科学館にやってくる！同館のプラネタリウムにも登場しているマールが、再び絵本を抜け出して、今度は特別展示室で物理の世界を冒険します。振り子になってゆらゆらしたり、スーパーボールロケットで宇宙へ発進！ほかにダイビングやキャッチボールで遊ぶマールと一緒に、滑車や風船を使って物理の法則を応用した13の実験にチャレンジしながら、物理の不思議を体験できます。

実験記録シートをすべて記入した参加者

には、なぞるとマールが描ける特製「お絵かきかたがみ」をプレゼント。特別展でしか見ることのできない、1日2回の「スペシャルサイエンスショー」にもマールが登場します。1階工作室では7・8月の「工作の日」に、マールが山からころころ転がる「おばけのマールとどうぶつルーレット」の工作を実施(参加費300円。夏休みは土～火曜に拡大)。さらにこの秋の新作絵本『おばけのマールとシロ』にちなみ、特別展開催中の4と6のつく日には、先着1,000名にオリジナル紙製サンバイザーがもらえます。新作グッズも登場する、マールづくしの特別展です。



懐かしい景色に出会う絵画展

吉積すえ子作品展

～MEMORY 北13条物語～

8月1日(水)～31日(金) 7:00～18:00

天使病院 天使ギャラリー

(札幌市東区北12条東3丁目1-1 TEL011-711-0101)

休館日/なし 観覧無料

※土曜午後、日曜・祝日は正面施錠のため夜間救急玄関より入館

北海道大学のほど近くで生まれ育った吉積すえ子さんが、思いに残るかつての街並みや暮らしの様子を描いた絵画展を天使ギャラリーで開催します。



MEMORY 北13条物語

同ギャラリーは、吉積さんが生まれた場所でもある天使病院の正面玄関に併設されたパブリックスペース。木造家屋が軒を並べる通りを行き交う人々や子どもの姿といった、少し前の札幌の生き生きとした情景をお楽しみください。

画家を魅了した富良野の原風景

幽邃の鳥沼

佐藤武写真集

佐藤武・写真・文

定価:本体2,000円+税

北海道富良野市に位置し、開拓の面影を残す鳥沼公園の幽邃に満ちた四季を、北海道を代表する画家である著者が写真と詩で構成した写真集に収めました。

アイヌ語でも「チカブ・ウン・トー」(鳥のいる沼)とよばれる鳥沼は、原始の森に囲まれた公園の象徴です。その季節の変化を追いながら撮り続けられた写真は、画家ならではの感性に溢れ、湧水を湛えた鳥沼に寄せる誠実な思いが伝わってきます。



中西出版
A4横変形判、95頁
2018年4月刊行

心は出会いで育ちゆく

龍の午睡

子どもの心に風が吹く

菅沼肇・著

定価:本体1,389円+税

教員を経て北海道教育庁の指導主事や上川教育局長などを歴任し、道内各地で教育指導に携わってきた著者が、心に風が立つような自らの体験や教育への思いを一冊の本にまとめた。

自身の子ども時代や教師生活の中での印象的な出来事、教育指導者として感じたことなどを清新な筆致で展開。巻末には附録として研究大会での講演、学習指導要領の底流を解説したスライドなどを収録しています。



中西出版
四六判、207頁
2018年7月刊行

山を楽しむための「入口」の本

新版 北海道登山口情報400

全国登山口調査会・編

定価:本体2,000円+税

山登りの第一歩は登山口から。道内外の登山者に好評を博した『北海道登山口情報』が、40カ所以上を追加し、さらに便利になって4年ぶりにリニューアルされました。

登山口へのアクセスや駐車場の状況はもちろん、トイレや電話、案内板など、現地を訪れる前に知っておきたい情報を写真つきで掲載。下山後の立ち寄り湯や周辺の温泉・自然公園の散策路入口まで網羅した、自然探訪に欠かせない一冊です。



北海道新聞社
A5判、384頁
2018年4月刊行

